

2021年10月17日（日）／説教者：國分美生

説教：「イエスが見たハラスメント」

聖書：マルコによる福音書2：13～17

イエスはガリラヤ湖のほとりで徴税人・レビと出会われ「私に従いなさい」と召かれました。ローマに収める税金をとりたてていた徴税人はローマ帝国から圧政を受けていた民衆にとっては、憎悪と軽蔑の対象でした。また、ユダヤ人にとって異教の神を拝むローマ人は「異邦人」であり、仕事を通して異邦人の手先となる徴税人たちは汚れた者たち。そのような彼らと交わることは自分の身を汚すことである、と律法学者は考えており、レビ達と共に食事をするイエスを非難しました。徴税人たちはユダヤ社会の中で差別を受けている者たちであったことが見えてきます。差別は社会構造の中でつくられ、罪びと・汚れた者と呼ばれている人たちは病人をはじめとして、ユダヤ社会の中で構造的に最も不利益を被っている側の人間たちでした。

この律法学者たちの言動はいままでいうところの「ハラスメント」に思えます。平等な関係ではなく、力の強い者・声の大きい者がその圧倒的な力をふるって、自分より弱い立場の者に対して行う嫌がらせがハラスメントと定義されています。

律法学者たちは、自分たちの言動が「弱い者いじめ」になっていることに全く気付いていませんでした。ですがそれは、社会における宗教的エリートたちが正義を振りかざし、律法を根拠にして、上から目線で、救いを求める人々を追い詰める行為だったといわざるを得ません。イエスはそんな宗教的エリート者たちに対してきっぱりと反論します。「丈夫な者らに医者はいらない。いるのは患っている者たちだ」とイエスは言われます。罪びとと呼ばれた徴税人たちとの共食に神の国の祝宴の先取りのイメージが重なります。イエスがなされたことは、ハラスメントに満ちた社会の常識の中で、それを全く覆すことでした。神の愛によるのではなく、人間が人間を支配し、裁く現実世界をイエスは見つめ、具体的に行動し反論されました。

イエスの言葉は「差別されているわたしたち」という目線で見れば、この心の嘆きを主は知っていてくださる、という励ましの福音ですし、「差別するわたしたち」という視点に立ってみれば、自分の思い込みを払しょくしてくださり、新しい命、新しい生き方を促してくださっているという、これもまたうれしい福音です。そしてまた、イエスの律法学者たちに対する返しに注意して目を向ければ、私たちがこの世で神ならぬ者の支配、圧政を受けている人々と共にどのように生きてくべきか、道は示されています。（國分美生）